

真理への道としての暗号と愛、そして理性 —暗号の読解と哲学的信仰（2）—

伊 藤 明 房

愛知教育大学 昭和50年卒

はじめに

われわれが真理存在について、時間現存在のうちでわれわれに可能な完結として述べようとしていることは、結論として理性、愛、暗号として巡回しようとしていることであり、そのことはそれ自体において一者のうちにある。われわれは、完結しているものとしては不分離であるものを分解し、また順々に論究する。（『真理について』第三部 第三篇 真理存在の完結 四 bb 理性、愛、暗号としての道の性格描写。）⁽¹⁾

上記の『真理について』（1947年）は、ヤスパース第二の主著と言われる『哲学的論理学』構想の第一部にあたる基礎論「包括者存在論（*Periechontologie*）」を展開する、哲学的論理学第一巻（*Philosophische Logik erster Band*）である。ヤスパースは、理性を開明する思惟、理性の自己意識であると述べている。したがって、この論理学は生に密着した思惟の論理的明晰さの意識としての「新たな包括的論理学」なのである。⁽²⁾ 第三部は、真理を考察する『真理論』になる。「哲学することにおいて、理性と愛は根拠であり、暗号は真理の完結である。」（註⁽¹⁾ 15頁）とするヤスパースは、暗号は「一切の認識を超えた客体的なもの」、象徴存在である「暗号存在の意味を存在意識の完結として把握したい。」と論述している。私たちの存在意識というのは、主体—客体—分裂状態において「相互に覆い合う」包括者のうちにおける主体性の意識と言える。（312-316頁）それゆえ、「暗号は客体でもないし主体でもない。（略）全体的に存在がそこで現在のとなるような仕方で主体性によって貫徹されている客体性である。」（329頁）とされるのである。

真理論は、真理⁽³⁾ —「われわれを力強く惹きつけるもの（真理存在自体）が、何であるかということ」を問題にし、「真理存在の意味の諸様態のなかで、そして真理が動いているところで開明」しようとしている。包括者の諸様態において思惟するのである。包括者の諸様態における真理存在は、「われわれにとっての存在」であるから伝達（*Mittelbarkeit*）のうちに現存在するものである。私たちは、日常、伝え合うことで相互理解を進めるけれども、相互理解の前提は包括者の様態を共にすること、真理存在を共有することである。⁽⁴⁾ このとき自我意識（私）が存在経験を自覚すること、このことを存在意識と呼ぶのである。包括者の様態における私たちの真理意識を指している。

真理は、存在意識の完結へと進む。暗号を読解する真理意識は、真理存在の完結である暗号存在の意味を把握しようとするのである。

1 暗号のうちの存在意識⁽⁵⁾

ヤスパースは言う。存在するもの一切は、「超越する働きのうちでの客体存在の様態の一つの変容を通して暗号となる。」(331頁) 形而上学的思惟(形而上学『[哲学Ⅲ]』)においては、すべての現存在が暗号となる可能性を示したが、真理論では客体存在の変容という観点から暗号への変化を論議するのである。

「哲学することは存在意識のうちへと精通することである。」(359頁) このように述べられる精通とは、以下のことである。「諸々の象徴のうちでその完結を獲得する。」(同上) 私たちが哲学するということは、象徴という目標を暗号解読という方法によって思想へともたらすことである、とヤスパースは考えている。暗号文字という象徴存在を読解するのである。そこに至る私たちの存在意識は、包括者の様態の意味を把握する。

a 現存在とは、「現存在(生)を促進するもの、有用なものが真であり、・・・(略)・・・おのれ自身の幸福を意志している。」自分にとって合目的な満足が真理なのである。「現存在の交わり」は利益の共同体であり、闘争を避けて有利な妥協を見出そうとする。そのための対話の技術を身につけようとする。有用性が真理の尺度なのである。この現存在の全体は、共同態という集団的なもので、真理は「習俗と伝統」という習慣として表される。

「現存在は意識として、ないし心として、おのれを表現し、おのれを叙述する。」現存在の内面性の表出が感情である。(註⁽⁴⁾ 29-33頁) 現代の心理に関するハウツー本などは、有用性に価値を見出しているといえよう。

b 意識一般の意味は、「所与の直観や論理的な明証性を通して基礎づけられた言表のもつ妥当のうちに一義的な真理を捕捉している。」普遍妥当的な真理であり、経験可能性において獲得されるのである。これは私たちの思惟可能性、思考能力であり、すべての真理の媒体となるのである。しかし、現存在においては、真理の承認はなかなか同一にならない。

「信仰の諸根源が伝達され合う」限界が意識されることになる。現存在は、妥当性を利用しようとするからである。(同²⁴⁻²⁹頁, 33頁)

c 精神の真理は、「みずからのうちで完結している全体に帰属することを通して存在する。」この全体はイデー(理念)と言い、「受容し、拡大し、活気づけ、そして秩序づける衝動として運動する。」受容するのは、「事柄を貫く客観的なイデー」を「迎え入れる主観的なイデー」であり、秩序づけ拡大し(私)を活気づける。イデーは、私の活動性の「根源であり、目標」である。だから、討論という精神的交わりにあつては、「他人のイデーに与ろう、そして自己自身をイデーによって導かせようという心構えと努力」とが、誠実さの条件になるのである。また、イデーに導かれることにより研究は実りある豊かな認識を獲得できる。「世界の客観的な諸組織は、単なる機構から生きた課題となり」、行為する私に「効用と特殊な目的とを越えた重みと意義」とをもたらすのである。(同³⁴⁻³⁵頁, 38-40頁)

客観的イデーは事象のイデーであり、主観的イデーは私たちがその中に生きている内実としての事象のイデーということになる。物質とか生とか歴史的精神(民族・職業・文化)、科学、国家(制度)、そうした「秩序づけられた全体性」イデーへの「行為、労働、探究、知を通して」の参与が真理である。「規範づける客観的な理想として(イデーの図式)」、信念として性格づけられる。このように精神は、現存在における実在性、思惟として存在しているのである。(同⁴⁰⁻⁴⁶頁)

よって「実在する世界を諸イデーの下に完全に思惟すること、また形成することはできない。」イデーは、現実化する運動のうちに現在するもの、という限界をもっているのである。精神は、「精神に魂を吹き込みながら、また精神を突き破るところの実存によって担われている。」それというのも、現実には「真理の諸様態が相互にもつれ合って、各々の真理の意味に明晰性と整合性とが欠けてしまっている只中に」、私たちは生きているからである。（同51-53頁）

d では、実存の真理とは如何なるものであろうか。ヤスパーズは、このように定義する。

「それを手にすれば生きかつ死ぬことができるような真理の意識、・・・それと同一となるような真理の意識を得たいと望んでいる。」（同52頁）⁽⁶⁾それは「実存意識」、不可視なものであるが「私自身がそれであるものは、他の一切のものを担い充実するところの確信である。（傍点、引用者）」（同57頁）

ただ端的な無制約性において、自存できるものである。（S.621）

意識一般の妥当性、精神のイデーにおける普遍性においては、「^{ベルゲン}人格が排除」されたり「非人格的なものに留まっている」のであるが、「私が何ものかを重視したり、選択したり、決定しなければならないとき」には、良心を規定する人格という全体的な力が語るのである。「根源としての実存」が現存在のうちに実体的に、精神のうちに〈私〉の意思として現れたものが人格であらう。

実存は、実存的交わり（*existentielle Kommunikation*）において「実存に対してのみ存在するもの」で、「心理学的な個人」や「観察され得る個人」ではなく、「意識の相互理解」では把握されない人格の交流において現れているのである。（同58-61頁）

実存の真理は、ただ単にこの唯一の真理といったものではなく、実存から実存においてあるところの真理である。（S.622）時間的な運命の運動のなかにもつぱら在って、

（略）、超越者との緊張のなかにもつぱら在るものとして、決して自己開明に至ることのない真理に留まるのである。（S.623）

実存を開明する思惟（『実存開明〔哲学Ⅱ〕』）においては、「実存は超越者なしには存在しない」という命題に表すことができる。これは実存という包括者が超越者との緊張のうちに存在していることを示すものである。しかし、現実の世界で真理意味は明晰性を欠いている。その都度の整合性を示すことはできるけれども、世界の総体は知りえない。

「人間の世界は、相対的総体性のなかで現実的になるものである」と理解される。⁽⁷⁾世界はイデー（理念）として在るため、内在にあっては「実存喪失」の状況が一般的である。

ヤスパーズは、存在の欠如、「実存の存在確信」が欠けていると言う。ただ超越者を欠いている意識ではあるが、「欠如は漠然とした感情のなかで感得される」ことになる。この感情は、「実存の可能性」に基づくものと考えるのである。（同62頁）存在可能としてある実存が「みずからを求める」とき、私たちに実存意識が訪れるのであろう。実存の自己確信であるが、同時に存在自身（超越者）を覚知するのである。

このように超越者の本質は、「超越者はもつぱら実存にとつてのみ存在する。」という命題に表される。実存の根拠として存在すると考えられている。実存の無制約性とは、「一切の世界存在を超出する超越である。」（同78頁）世界現存在を突破するのである。⁽⁸⁾

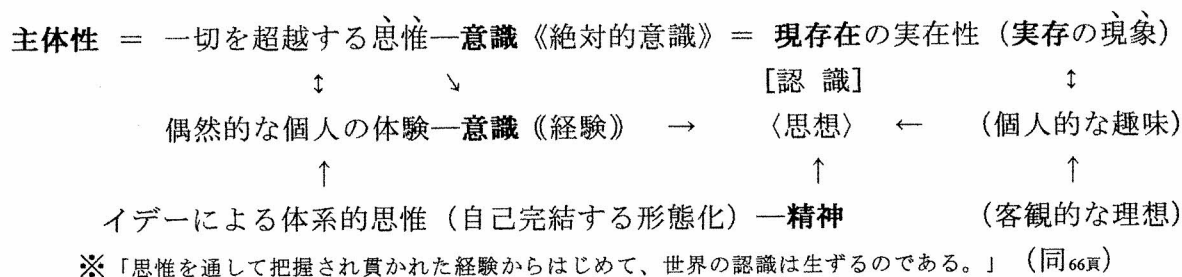
実存の根拠は、自分で自身を造り出したのではないという意識を通して、常に現前している。（S.632）

こうして実存の現実、一切の包括者（現存在、意識一般、精神、世界、超越者）に対して開かれているのである。「選択する実存の決断性は、最も開放的な眼差しと結びつくことになる。無制約的な歴史的具體化は、世界が明瞭になることと同じである。」（同⁶²頁）
 こうヤスパースは叙述する。無制約的な歴史的具體化とは、実存の＜歴史性＞のことである。（註⁽⁸⁾参照）「歴史に身を沈めることにおける誠実さ」と表現される。それは、自身の愛から一切のものが開放されて在る状況を指しているのである。無制約性において、実存の意識は「絶対的意識」⁽⁹⁾と呼ばれる実存の存在確信なのである。

まとめるなら実存の真理は、「実存は真理を信仰において経験する。」（同₉₅頁）という命題に表されている。超越者の経験は、実存の獲得（実存生成）であり、絶対的意識とは「本来的な現実性意識」（同上）である。

今や私は世界の内部にあると同時に世界の外部にあるのであり、その時にはじめて私自身となるのである。(S.640)

したがって、実存の真理意識は、普遍妥当的なものではなく「歴史的な共同態にとって普遍的に妥当するもの」、典型や類型—理想に対する現存在にとっての「主体的妥当」でもなく、絶対的に妥当するものである。代替えされることのない個人（単独者）にとっての「真理そのもの」、ということである。この単独者としての人間を指すのが、主体性という言葉である。「主体性は実存の現象である。」⁽¹⁰⁾（同112-113頁）ゆえに主体性の意識は、実存意識と言えるであろう。以下に図示してみる。



さて、上述の「世界の明瞭化」というのは、可能的実存による暗号文字の読解のことを言うのであるが、ヤスパースは「暗号文字解読は精神の領野での形態化」である、と述べている。（同¹⁵⁷頁）これはどういうことなのか。彼は、世界は私たちに対して以下のように存在すると言う。「知覚世界であるか、・・・現存在の関心の洗礼を受けた世界であるか、認識された意識一般の世界であるか、実存的世界であるか、暗号の世界であるか、いずれかなのである。」（同⁷²頁）つまり、日常世界か、世界存在か、実存の共存か、ということ。そして暗号解読は、内在にあって暗号の世界（超越者の言語）を聴き取ること、世界の全体像を直観しようとすることは、実存が精神を媒体にして語ることである。思惟の機能がイデーにより体系的に遂行されるのである。

*

実存の存在意識は、本来的現実性の意識である絶対的意識として、世界を開放的に把握することになる。「客体の暗号への変化」である。実存の意識において、客体が暗号として浮動的 (schwebend) になるということである。世界存在の客体性⁽¹⁾のうちに隠されている暗号が、世界の秘密を示すのである。(331頁, 329頁)

この暗号解読においては、対象的なものの明白性と固定性と限定性が、これらのものを可能にする浮動的客体性のうちで同時に消失する。(S.1031)

客体は暗号として、限定されて固定された明白な対象ではなく、「客体であるあり方が変容されるのである。」客体が透明的 (transparent) になると言われる。それは、「変容のうちで自ら姿を現す超越者を自らの中に隠し持っている」から、とされる。また、「客体が深みから魂を吹き込まれているという存在意識」と表される。(332頁) ヤスパーズの言う客体性は、主体性の意識—実存の存在意識における世界の相貌であり、私たち人間にとって暗号文字 (Chiffreschrift) という超越者の筆跡 (魂の吹き込み) である、と理解することができるであろう。

暗号は、象徴存在である。象徴は「魂と存在とが接触する場合の点火装置であり、それによって存在が言語を獲得する」。「象徴とは言語である。」(同上) だから、客体性の要素である直観性が、事象存在として魂と存在との接触を妥当な命題に表現したもの、それが象徴存在である。命題は、比喻表現によって「存在の類比 (analogia entis)」(356頁) を示しているのである。

ヤスパーズは、こうして存在を「客体性の中に直接に両者 [主体と客体] があるという仕方で把握すること」(328頁)、すなわち暗号解読という方法によって「存在それ自身への運動の自由な空間をつくり出す。」(336頁) この哲学的思想は、感性的日常生活の明確さから透明になっていき、「精神的な確信の領域へと超越する」ことで存在を感得することになる。存在が明白化されるのである。彼は「存在の純粹に靈性 (Spiritualität) において確認されるような哲学的思弁」と称する。(340頁) 靈性は、精神の包括者と実存という無意識的なものを指していると思われる。哲学的思考は、無意識的なものを明白に意識化することである。思弁、すなわち「根源的な哲学的思考は暗号である」(345頁) と考えるのである。

したがって、暗号は「人間の変容のうちにはじめて姿を現す」ことになる。人間の変容は存在意識の変容と捉えられているから、われわれである包括者の様態の変換において、私たち人間の変革は為されるといえよう。つぎのように表現されている。

暗号を聞き取る存在者がはじめて人間となるのである。(S.1037)

象徴の中でその可能的な完成を見出す、哲学することの運動⁽¹²⁾である。それはエロースであり、・・・(以下略)・・・(S.1041)

2 包括者の諸様態における愛の性格

実存の絶対的意識としての愛は、充實された意識として開明される。積極的には信仰として、瞑想的には空想として。愛は、瞑想的空想による暗号を読解する原動力となっており、同時に超越者への愛 (エロース) となるのである。信仰は、存在確信を明確に意識するという経験であり、空想 (Phantasie) は、事物の直観において像と思想をもって存在確信を開明すること、すなわち暗号解読を遂行するということである。両者は、愛の両翼というべき様相を呈している。存在確信の愛の様式が信仰であり、存在確信の開明の様式が空想である。⁽¹³⁾ このことから愛は、哲学することの根拠であるといえるのである。

この根拠として愛の諸性格は、信仰や空想のみならず包括者の諸様態を貫いて、「あらゆる様態の中で現象していればその身体ともいふべきものを手に入れるのである」。(256頁)

(1) 生命的現存在と知性的意識における愛

生命的現存在の愛は、「肉体の力や繁栄として」世界における「生命の歓喜」、冒険や危険における緊張の快感、「緊張と安らぎ、熱望と充足、覚醒と眠り」とのリズムへの欲求、こうした衝動として現れている。また、肉体における一体化、自然との一体化である。個体（個人）は、類の生命の「単なる通路であり、全生命の場所」として犠牲になりつつも「充実した陶酔を感じ続ける」ことができるのである。「父が子供をつくり、母が子供を産むこととしての実り豊かさ〔産出力（Fruchtbarkeit）〕」（14）、新しい形態としての個体を出産するという不死性である。（256-257頁）

知性的愛は、「不一致なものの中で安らぐことのない衝動」―「正当性としての真なるものの明証へ向かう衝動」であり、「知的な洞察という無類の快樂」における安らぎへの運動である。知的洞察という快樂は、「諸問題を解決するために強制的に知られたものの実り豊かさ」である。「諸法則の「合目的性」は、諸々の解決の「美」とも呼ばれる。」プラトンは、本質的なものの強力な仮説〔イデア〕をもったのである。

個々の正当性を通して「正当的なものの宇宙〔der Kosmos des Richtigen〕」が愛されるのである。「洞察可能な必然性に対する信頼」であり、スピノザにおいては「無時間的に存続するものの中で安らぎへと達すること」であった。普遍的なものの秩序づけられているあり方と調和―事柄そのものにおける統一を洞察することである。この統一は、「われわれのうちにある統一の力」により把握される。カントは、この理論的「理念」は世界そのもののうちにもあると、客観性をもつと認めている。

正当的なものへの愛は、洞察においては、「無時間性であるゆえに不死性であるような何ものか」を私たちに経験させるのである。（257-260頁）

(2) 精神的雰囲気における愛と実存的愛

精神的愛は、「私を導いている理念の力によって愛している」と言うことができる。

私たちは、行動と思想において歴史的世界に属しており、家族や国民、使命や課題といった現存在と意識一般の秩序に則った機構⁽¹⁵⁾をもっている。その機構のうちには、まとまりをもった全体に導こうとする理念が働いている。「一つの課題の理念に従ってその使命を遂行すること」や人間と諸制度や法則、自然や景色などを見て取る内的認知（理念の導きによる愛）、これらのうちに精神的雰囲気がつくり出されるのである。

この愛は、「精神的に貫徹されている生命を・・・絶えず生み出す働きのうちに現れる。」それは感激の中に現れる「現存在に関する歓喜」であり、出会う一切のものを肯定し親密になるということである。精神的愛の実り豊かさである。そして、理念が典型的に現れた歴史的形態との出会い⁽¹⁶⁾のうちに、永遠的な「不死性を内的に認知する」のである。

実存的愛は、「無制約的な結合であるような忠実さである。」道徳的信頼性でも気質の不変性でもない、「代理不可能な唯一回のなもの」である、唯一の個人との出会いである。

「愛は実存から実存へ向かっていく。」実存としての個人（単独者）は、「種や普遍的なものや理念に対して優位をもっている」愛、自己の愛を選択していく決断の安らぎにより充実される、愛をもって人間に向き合うのである。代理不可能な個人は、「普遍的なものであり、時間的なものであるけれども同時に永遠である。」時間のうちの永遠性として、決断を通して不死的になるということである。（260-264頁）

実存の愛は、唯一的、普遍的なものとして存在の暗号を把握する。

(3) 存在そのものである包括者への愛

われわれである包括者の様態において愛する対象に出会うのであるが、あらゆる対象を通して愛は「世界へ、神へ向けられている。」全体としての世界は、「直接的な現存在的感情」によって美的直観のうちで了解される。また、「秩序によって支配されているものとして」、世界への知的満足をもつ。神は、「対象なしに直接的に起こる愛の感情」から、「一切の現存在と全体的な世界存在は超越者の印か比喻〔暗号〕となる」形で愛されるのである。（271-275頁）

愛は事柄としての存在に対する愛であり、また人格に対する愛である。（S.1002）

人格的な愛は本来の愛であり、第一番のそして根源的な愛であり、その愛において、存在に対するあらゆる愛は満足を見出す。（ibid.）

以上、包括者の諸様態における愛の性格をまとめると、つぎのようになる。

① 結合するもの：一体化への切望であり、完全性への傾向性である。【運動】

一体化された存在にあつては安らぎである。

② 存在の開示：根源的な内実を開示する。憧憬や希望で充たすもの【本性】

③ 実り豊かさ：自己存在の飛翔において、時間のうちで産出すること。

我意を断念し、純粋なものへの帰依すること。【意欲の根拠】

④ 一切の包括者の包括者：あらゆる様態の包括者を現前させるものである。【現前性】

（251-255頁 aa 愛の予備的性格描写。より）

上述の諸様態の性格描写を見ると、切望（意欲）→憧憬（希望）→産出（創造）【現前性】という存在への愛の運動により現象したものは、愛が永遠的な不死性（永遠性）であるということを表しているといえよう。

愛の運動は、「不十分な状態を抜け出して充実と安らぎへと向かう探求として」（283頁）性格づけられる。本来的存在への飛翔、「すなわち愛は超感覚的なものの直観」であり、「純粋な意欲の中で存在を肯定する」（同上）とともに現存在の中に実現させようとするのである。人格に対しては、「愛は交わりのうちで、他の自己とともに自己になることである。」愛の諸契機として、「飛翔、現実化、自己生成」とまとめている。

飛翔は、根源への関与であり、暗号によって超越者を感じ得するという「無時間性のうちでの愛の完結である。」しかし、愛は「有限なものへと没落して崩壊する」方向へ、また「無限なものへと上昇する」方向へと動くのである。ゆえに人間は、有限的な渴望である「憂さ晴らし、誘惑、崩壊から抜け出して」、新しい人生への「転換についての決断」をしなければならない。人間には「改心」が必要なのである。（285-287頁）

愛の真理は、無限な様態の中へ有限な様態を受容することによって目覚まされ、どんな有限なものをも上から貫徹する導きによって目覚まされる。（S.1008）

日常生活における私の態度を、「世界喪失、自己満足、現実からの逃避」ではなく、根源からの「内的な導き」によって愛の現実化となすことである。それは、隣人愛の実践であろう。内的な導きは、私の「根拠に対する信頼によって可能となる」のである。ここにおいて自己生成とは、「愛の時間形態である」といえる。したがって、愛は、共同存在のうちで実現されなければならないのである。「人間愛から出発すれば、あらゆる存在と出会う。」とヤスパースは述べる。

この共存の状況は、愛に先行する諸形式⁽¹⁷⁾をもち、「それ自体ではまだ愛を欠いている」という。「感染、共感、共同体験、了解」の諸状況は、包括者の諸様態において実現されるが、それは「生活の流れ（興味、習慣、対抗）、意識一般、精神の統一」におけることである。共存における愛は一方的な愛ではあるが、「一人の人間の自分自身との孤独な交わりの形式となりうる」し、他者に自分を結びつけるものにもなりうるのである。「双方からの愛」、「時間現存在における交わりという唯一の形式」における愛が、本来的な愛の実現なのである。（289-290頁）

自己存在として在る諸々の人間の交わりのうちの愛こそ、時間現存在における終局の可能性である。（S.1010）

交わりとして、これらの内容〔様態におけるすべての愛〕を共同社会的なものとして自らの中に受け入れる程度によって、愛は自身を展開する。（S.1011）

このように「愛は人間の道である。」プラトンの根本思想に基づくならば、「中間存在としての愛」⁽¹⁸⁾である。人間が、そこで自分自身に基づいて生きるという在り方を示している。「完結に向かって努力するという中間存在のうちなる運動による完結」が、人間愛である。そこにおいて、瞬間の充実という安らぎを得ることができるのである。（294-296頁）

私たち日常の愛における性的なものは、こうして「形而上学的愛の出来事のための比喩となる」と、ヤスパースは愛の解釈を進める。

3 性愛と形而上学的愛

性愛についてのヤスパースの問題意識は、どんな内実をもちうるか、諸様態に生氣を与え、逆に諸様態によっていかに導かれ、また排除されるかということである。

性的なものは、精神性をも特徴づけており「男が女によって、女が男によって本質的に規定されることを意味する。」異性の魅力や要求、束縛は、日常生活を支配しているといつてよい。この性愛における愛の諸様態が考察される。（264-271頁）

a 「生命愛は、性欲的である。」欲望の衝動性（オルガスムス）がリズム的に反復される「生命体の無意識性」である。

b 精神的展開であるエロティク。「見ることと演じること」が一つの世界を生み出すという、多様性と変化を要求するのである。性的な魅力の手段となるものである。

c 「契約による結合である婚姻」。意識一般の正当な愛である。家族をつくり、経済的継続によって子どもを養育する目的をもつ。法的な権利と義務の対象であり、道徳法則の支配を受けている。

d 形而上学的愛は、無制約的で歴史的で無契約的な結合のなかでの、二つの愛する者の実存が自己となる飛翔である。超越者に根拠をもつ実存の愛のことである。

性愛は、これらの分離されたものではなく、すべての様態が相互に関連しているものである。ところが、一つの様態への没落の危険を私たちは経験することになる。

エロティクは遊戯であり、本気ではない誘惑者は快楽を失うと他者へと向かう。婚姻は、法的な強制が牢獄となってしまう。形而上学的愛は、生命愛を失う「超感覚的なものへと変化させ」、技巧的に具体化（品格、礼儀、挙動の育成）してしまうのである。

性愛の諸様態を通じて永遠性の感覚を成長させるのは、互いに愛し合う人々である。性的なものは、愛の根源へと深まりながら成熟しなければならない。

愛の諸様態の「一切を支えて、一切を貫徹している性愛という極」、性愛のもつ親密さは、形而上学的愛の根拠というもう一方の極への通路となっている。ヤスパースは「愛の核心は何か」と問い、性愛という極に対する「形而上学的根拠からの愛」という両極を示す。形而上学的根拠からの愛によって性愛は充実され、「一者からの牽引力を経験する」と言うのである。⁽¹⁹⁾形而上学的根拠である一者、すなわち超越者からの愛によって二人の愛（性愛）は成就するのである。実存の生成であり超越者の経験であるが、これが形而上学的愛である。

性愛は、超越者への愛（エロース）である形而上学的愛へと昇華しなければならない。「婚姻は天で結ばれる」（婚姻の根拠は、・・・決して正義でも道徳でもなくて、形而上学的愛の超越性である）という命題に見られるように、人格的愛となるのである。それは、愛の展開が人間の内的変化を促し、「成熟しながら存続する」愛、本来的愛を示す概念である。

本来的愛は、私の内的行為によって愛をいかに保持するか、没落させるかという「個人の自己生成のあり方」に懸かっているのである。「自己存在と愛は同一のものである。」
(246頁) そのようにヤスパースは考える。

人間が何であるかは、その人の愛のあり方である。(266頁)

4 愛と理性

理性とは、あらゆる愛の様態をすべて包括して現存している時、この愛の特徴である。
(S.1004)

ヤスパースは、理性を「愛の諸様態の一体化したあり方での愛」と捉えている。これは、前述の愛の性格 ④ 一切の包括者の包括者、あらゆる様態の統一を媒介して超感覚的なものを直観する（包括者を現前させる）ことである。愛の飛翔によって超越者の感得—暗号文字の読解がなされる愛の完結である。理性が「すべての包括者の様態の紐帯」として思索されていることから言えば、愛と理性は、つぎの命題に表現される。

愛は理性と共同する。愛は理性の魂である。(S.992)

理性と愛は、一致するようにみえる。彼は、「愛はすべての包括者の包括者という積極的な根源のための言葉である。」(247頁)とする。そして、理性は「実存の本質的な可能性」として「可能的な実存の様相を保持するための唯一の力」であり、「哲学することのための・・・衝動」(205頁)であるとされる。

人間の根源は実存であるから、愛は実存の愛であるが、この愛は超越者に根拠をもつ形而上学的愛と言われた。前項のように、超越者からの愛を実存は魂としてもっているであろう。それでは理性はというと、実存の本質的な可能性《可能的実存》と考えられていることから、「理性の衝動」と言われるように存在へと開放されている可能性への運動であるといえる。(註⁽¹⁹⁾)「理性の根本特徴は統一への意志である。」(206頁)この理性の意志は、「何一つ見逃すことのない透視」、「思惟の最大限の可能性を展開するように駆り立てる」(208頁)弁証法的思惟の空間を開明しようとするのである。

このように理性の統一への意志は、思考的な愛（エロース）を伴って活動している。愛の飛翔が交わりにおける自己生成を促し、本質的なもの（根源）へと導くということである。究極目標である真理存在そのものへ向かうのである。

「愛は、世界及び神性を把握することにまで人間を拡大させる」ような切望（衝動を導き同時に充実していくもの）、あらゆる衝動を貫いて活動するものである。食欲や権力欲などは、特殊な目的に束縛されており、思考や認識を工夫を凝らしたものに於て奉仕させる強烈な衝動として現存している。そのような衝動は、「いわば愛が化身する諸形態」と言われるように包括者の諸様態において現れているのである。（255頁）したがって、愛は「第二部 認識の包括者」で考察されている「本来的意志」⁽²⁰⁾という意欲の根拠、「完全に透明な衝動」のようなものと捉えるなら、諸様態を経験するための原理である。

愛は快感、快樂（調和・美）、感動、そして実存への飛翔を促す切望へと純化するものである。私たちは、有限的な渴望から純粋な無限なものを切望することへの愛の展開によって、世界を経験しながら成熟していくのである。竹田青嗣は、人間の世界経験を支える体験を「エロス原理」⁽²¹⁾と呼んでいる。世界は、「味わわれているものとしての……価値的世界にはほかならない。」「快苦」「美醜」などの価値の審級として表示される、と言う。世界の認識論的構築は、エロスの体験が土台となって支えられていると考えるのである。ヤスパーズにおける、愛の諸様態への展開との共通項を見出せると思う。真理意味である諸様態は、存在に対する「価値評価」なのである。彼は意味について、「価値」によって基礎づけるとのことである（註⁽²¹⁾ 223頁、あとがき）と述べている。

愛と理性は、こうして「全く制限なしに活動的になるところでは一つになる」（247頁）ということである。「人間の全存在を貫徹するような全体的な交わりの意志である」（213頁）理性、この思惟により明晰さを求める無制約的な意志は、公明性への実存の意志と言える。対して理性の魂といわれた愛は、実存の意欲そのものである意欲的思惟（註⁽²⁰⁾）と言えるものであり、両者はもともと実存の「本来的意志」として一体のものであろう。一者を求める理性の空間では、「一切の存在者を愛する愛である」ところの「存在への愛が生じてくる」⁽²²⁾のである。「交わりへの心構え」と形而上学的根拠への忠実さをもっているのが、理性と愛の現実であるといえるであろう。

5 実存の存在意識と哲学的信仰

これまでの論及から、実存の存在意識は客体を暗号へ変容させる。実存の絶対的意識が本来的現実を暗号文字として読み取ることになるのであるが、暗号は象徴存在という客体性—絶対的意識において世界の全体像を直観することにより存在自体を捉えようとする、精神的確信である存在の明白化である。

暗号解読の思想は、私たち人間の存在意識を変容させるものである。包括者の様態における真理意識（真理存在に対する意識）が変換されるのである。ヤスパーズは、この哲学的思考を「哲学することの運動」という表現で思考するエロース（愛）と規定する。そして、本来的な人間とは、「暗号を聴き取る存在者」へと変革を成し遂げた人であると言う。愛は哲学することにおいて、存在自体への運動の空間を理性とともに作り出すのである。

ヤスパーズは、『哲学的信仰』（Der philosophische Glaube, 1948）において、包括者の諸様態と信仰について語っている。「信仰とは、包括者に基づく生であり、包括者による導きと充実である。」（註⁽⁶⁾ 31頁）と。信仰は、実存の絶対的意識である愛が真理（存在の確信）を意識させるという経験である。それゆえ有限なものに固定されない自由（浮動的）なもの、信仰とは超越者と連繫している実存の意識に名付けたものである。（S.28）

(1) 哲学的信仰の内容（第二講）

第一講においてヤスパースは、「哲学的信仰、すなわち思惟する人間の信仰は常に、ただ知との結びつきのうちにあるという特徴をもっている。哲学的信仰は知りうるものを知ることを欲し、自分自身を見通すことを欲する。」（18頁）と定義している。思惟する人間の信仰とは、『理性と実存』において「実存の生としての＜哲学すること＞」と言われた、明確に意識する自覚的な人間の信仰ということなのである。

信仰の内容が、以下のように命題に表現されている。⁽²³⁾

- 1 神が存在する : 一切の世界を超えた超越者、一切の世界に先立つ超越者を神と呼ぶ。
実存に基づく神の確認は、哲学することの前提であって結果ではない。神についての思想によって存在意識が高揚する。

なぜなら、実存の構造は「実存は超越者なしには存在しない」、贈与されたものという在り方だからである。実存を可能にする信仰である。

- 2 無制約的な要請が存在する : 本来の自己が現存在に発する要請として現れる、自由な行為の根拠であり、私を支えてくれるものである。

無制約的要請は、超越者からのものであるから、『哲学入門』における信仰の五原理の一つ、「人間は神の導きによって生きることができる」の内実を表しているといえる。『形而上学〔哲学Ⅲ〕』では、実存の超越的連繫を思惟することにより、隠れた超越者を確認しようと「超越する実存開明」を試みている。超越者（神）を顕現させる形而上学的思弁が、暗号文字解読である。超越者は認識の外側に在り、内在にあっては暗号文字として、あらゆる事物との結合の兆しが、私たち（人間）に感知される⁽²⁴⁾のである。

- 3 世界の实在性は、神と実存との間で消滅していく現存在である : 現存在の現象性。
すべての認識作用が解釈としての性格をもつ、認識された实在性のすべてのあり方が浮動しているということである。
常に未完結な出来事や行為に耳を傾けようとする心構えである。

実存の歴史性（贈与された在り方）にとって、世界に対する隠れた神（euds absconditus）の絶対的超越を確認すること、世界を神の言葉【暗号】として経験することである。実存と超越者との出会いを世界の内で実現するということである。

時間現存在は常に未完結であり、実存は自己生成するものであるから、この信仰命題に「人間は有限で未完成である」という命題が当てはまる。『哲学入門』において三番目に述べられていることである。第一、第二の命題は、私たち人間に関わる原理であるので、両者をまとめて見る。それは、世界の内で「人間は有限で未完成である」現存在である、ゆえに「人間は神の導きによって生きることができる」と表現できるであろう。人間である包括者の様態、意識的精神の現存在は世界の中に存在しており、世界を体験し意識し、理念として形成しているのである。このような、世界に拘束されながら自己実現していく人間存在のあり方を、第三の命題は表しているといえる。二つの原理は、『哲学入門』が『哲学的信仰』の二年後に行われたラジオ講演であることから、入門的なものになるよう挿入されたのであろう。いずれにしても、「世界の中では、永遠であるものと時間の中で現象するものとが会おう」ということなのである。

そして、これらの信仰命題は証明可能ではなく、注意を喚起することにより示されるか、思想による開明、訴えかけによる想起、いずれかによる以外にはないのである。

(2) 真理への道としての哲学的信仰と理性 — 結び

理性は前述のように、「全体的な交わりの意志」と規定されている。理性は、包括者の諸様態の価値を相互に関連づけることで、真理存在そのものへ迫ろうとする。「包括者のある一つの様態を孤立させて絶対化するような信仰」を防止し、存在するものや存在すべきものを対立をも含めて「あらゆる可能な調和」を求めるのである。ここで言われる信仰は、広義の信仰⁽²⁵⁾を指している。またヤスパーズは、理性を哲学することの根拠として、つぎのように言い表す。「私たちを己れの主観のうちから駆り立て客観の側から引きつけるものであり、・・・それによって私たちが本当に哲学的な生を生きることになるような何ものかである」と。(三 理性と交わり 60-61頁)「論理的自己意識・理性」(『真理について1』, 28頁)のことであるが、主観の側から言えば実存の交わりへの意志のことである。

上記(1)の考察で見たように、哲学的信仰内容が人間存在のあり方を示すとすれば、人間の自己生成が本来的存在(現実性)への道、「真理への道」の途上にあつて、愛しながらの交わりのうちで真理を見出すことを表しているのである。彼はつぎの二つの命題をもって、哲学的信仰は「交わりへの信仰とも呼ぶことができる」とまとめている。

真理は、私たちを結びつけるものである。真理は、交わりのうちにその根源をもつ。

(64頁)

哲学的信仰が《交わりへの信仰》と言えるのであれば、それは「理性の信仰」と呼んでも差し支えないであろう。理性は可能的な実存の様相を保持するもの、「人間存在がその最高の可能性を保持するように思惟によって助力する」(14頁)もの、すなわち可能的実存の論理的自己意識と言えるものである。このことから言えることは、包括者思想を展開する哲学的論理学は、哲学的信仰に支えられた超越する思惟により、可能性の空間を開放するということである。哲学的信仰は、実存の存在意識である愛の飛翔により、超越者を確認することを言う。

以上を踏まえると、哲学的信仰はヤスパーズの哲学する思惟、内的行為としての超越者を確認する思惟そのものを表す⁽²⁶⁾概念であるといえる。そして哲学的論理学は、ヤスパーズ自身が述べているように⁽²⁷⁾「思惟様式と知識の妥当様式を意識すること」の試みである。思惟の方法的客観化(『実存哲学』, 1938)ということである。『真理について』は、その方法的展開であるが、そこで方法的思惟を遂行するのが《理性》ということなのである。本論考における論議から、理性と愛は無制約的に活動するとき一致する、この実存の存在意識が、「そこから見られるならあらゆる立場が立場として見られたり、ここへ達するための段階として見られたりする」(註(1) 364頁)本来的存在意識であり、「理性の思考空間」と言われているものである。つまり、理性が哲学的論理学を展開するということは、一者を求める「真理への道」の途上にあるという、《理性(交わり)の信仰》なのである。

したがって「人間の進む道は、己れの可能性と神の導きとに対する信仰から出発する」、「哲学的信仰は、人間が自分自身の可能性を信じることである」(92, 96頁)と、ヤスパーズは定式化する。人間の道は、可能性という《自由》のうちにあつて、《理性の信仰》をもって生きていくということである。途上にある人間は、「理性的実存(vernünftiger Existenz)」(註(1) 241頁)と呼ぶことができるであろう。

こうしてヤスパーズは、「理性は望ましい人間存在の構図であるというふうに思われる」(傍点、引用者)として、つぎのように叙述しているのである。(28)

今日ではこの哲学をむしろ「理性の哲学」と名づけたと思う。

註

- (1) 小倉志祥、松田幸子訳『理性と愛と象徴 真理について』，理想社，1985年，195頁
Von der Wahrheit R.piper & Co.Verlag. München, 1958, S.962
- (2) 拙論「ヤスパースの哲学思想Ⅱ－包括者思想と哲学的論理－（承前）」，『哲学と教育』64号，愛知教育大学哲学会，2016年，結語及び註(35)参照。包括者存在論については、63号，2015年も参照のこと。
- (3) 浜田恂子訳『真理について 3』，理想社，1976年，12頁。「真理は勇気を与える。（略）真理に従う衝動は増大する。真理はよりどころを与える。（略）存在に結びつけられたものがある。真理は信頼を与える。「世界が溺れているならば、真理を告知することによって世界を救わねばならない」（孟子）」と惹きつける理由を述べている。
- (4) 上妻精・盛永審一郎訳『真理について 4』，理想社，1997年，100-110頁，Ⅱ 真理の意味の諸様態の比較的究明 c 伝達可能性の諸様態の比較 「伝達とは、もっぱら、われわれがそれであるところの包括者〔訳文は、包越者を使用〕のあらゆる諸様態における真理存在の様態である。」
- (5) 前掲書『理性と愛と象徴 真理について』，329頁，c 暗号（象徴）としての客体性 2
- (6) 林田新二監訳『哲学的信仰』，理想社，1998年，15頁，では、以下の表現になる。
「私がそれに基づいて生きる真理は、私がそれと一体になることによってのみ存在する。この真理は、あくまで歴史的なものとして現象するのであり、客観的な言表可能性という点では普遍妥当的ではないが、しかし無制約的なものである。」
Der philosophische Glaube R.piper & Co.Verlag, 1974, S.11
原著は、バーゼル大学での講演である。
- (7) 「われわれは絶えず・・・われわれについて知る以上のものとして存在するのであり、そして世界は世界について研究され得る以上のものとして存在するのである。」
「常にわれわれが見るところは一側面であり、一つのパースペクティブである。われわれは限定された方法において、特定の経験を通して見るのである。」 前掲書『真理について 4』，Ⅰ 真理の意味の多面性 2 存在自身がそれであるところの包括者の真理 a 世界，68頁
- (8) 前掲，『哲学と教育』62号，2014年，所収 拙稿「ヤスパースの哲学思想－実存の歴史性と交わり」3-5頁，参照
- (9) 草薙正夫・信太正三訳『実存開明〔哲学Ⅱ〕』創文社，1972年，第八章 289-329頁，参照。「根源からの運動」の相、「充実されたもの」の相、「現存在における保証」の相、に分けて考察している。
- (10) 「主体性はもはや偶然的な偏差を伴う個人的な趣味を示すものではなく、超越的に要求される無制約性を遂行するものである。普遍的なもののいかなる様態をも頼りにすることのできない主体性の妥当のうちには、個人の制約された偶然性の主体と、永遠の靈魂の無制約性の主体性との最も極端な対立が存在する。』『真理について 4』，113頁。主体性同士が対立するとは、「現存在は実存の実在性である。」（同157頁）

からである。実存は、現存在に現象するのである。

- (11) 「客体性とは、対象性（客体存在）、直観性（事象存在）、妥当性（要求存在、つまり同意あるいは直観に関する要求存在）を意味する。」『理性と愛と象徴 真理について』、313頁。知（知るということ）は、客体と直観（感性的知覚）に対し、主体が確かさを求めることといえるから、客体性とは「認識を超えた客体的なもの」（同³¹²頁）を表す概念である。
- (12) 「すなわち哲学することは思考的なエロースによって引き起こされた人間の生だからである。哲学することは、それ自身愛の実践であるところの知である。」「両者が一体になって初めて、すなわち愛しつつある知、知りつつある愛、愛であるところの知、知であるところの愛が初めて真理存在の完結をもたらすのである。」同上 249-250頁。 両者とは、思考による反省としての愛、特殊な生命の自然力としての愛を指す。現存在と意識一般（知性）との区別であるが、この両者の統一が思考的なエロースである。
- (13) 斎藤武雄『ヤスパースにおける絶対的意識の構造と展開』、創文社、1981年、166頁。第三節 充実せる絶対的意識の構造関連 163-166頁、参照
- (14) 沼田 隆『実存と宗教的経験』、杉山書店、1987年、38頁。第1部 ヤスパースにおける実存をめぐる II 愛の思想—『真理論』を中心に—、この論文を参照した。
- (15) 飯島宗享訳『現代の精神的状況』〔ヤスパース選集28〕理想社、1971年、第一部 現存在秩序の諸限界、において論述されている。現存在の秩序としての「合理化し機械化する作用」による作業機構を指す。「現存在保護のための巨大機構」と表されるが、「3 技術的な集団秩序と人間的な現存在世界との緊張」において・・・一機構の支配—統率 等々について考察される。
- (16) 前掲書『理性と愛と象徴 真理について』、281頁。「われわれの存在の典型や・・・人生の模範例の中にあつて、（略）敬愛する高貴な人間に対して、・・・こんな時何を考え、何を語り、何を行うだろうか？と問うとき、（略）私は他者である彼を心に思い浮かべ、・・・いわば彼のうちで行為する。」
- (17) 同上、288頁。a 感染。一緒にいることで模倣による同化や感情的な高まりのなかで、依存的な状態において自己を充実させている。b 共感。他者の悩みや喜びを察知して、共感する。c 共同体験。事柄に意識的に関わり、体験を共同で認識して悩みや喜びを分かち合う。d 了解。他人の体験、他人の思念、他人の意志しているものを受け取る。
- (18) 同上、294頁。「愛は、いわば人間が生前に見ている永遠なものを想起させ、この回想に対する能力を具え—愛は美しいものの中で生産すること、不滅になること、不死性の分け前を得ることを意志する—愛は人間が飛翔する段階で彼を本来的な現実性へと導いていく—」、とヤスパースは記す。久保 勉訳『饗宴』岩波文庫、1970年、107頁、115頁、117頁。「滅ぶべき者と滅びざる者との中間に在る者」、「愛とは善きものの永久の所有へ向けられたもの」、「美しい者の中に生殖し生産すること」等、討論されている。
- (19) 「一者からの牽引力」については、前掲、拙稿「ヤスパースの哲学思想Ⅱ—包括者思想と哲学的論理—」63号、12頁、において「一者の引力」、「一者に至ろうとする

- 意志<統一への意志>」と解した。「ヤスパースの哲学思想Ⅲ－暗号の読解と哲学的信仰(1)－」, 66号, 2018年, 17頁, では、「実存を贈与する超越者」の要請として考察している。
- (20) 拙論, 「ヤスパースの「認識の包括者」とは－認識作用＝包括的な意識一般の分析について－」 65号, 2017年, 37頁及び註(11)
- (21) 竹田青嗣『エロスの世界像』三省堂, 1993年, 1-9頁。序 エロスの体験と世界, 「「エロス」あるいは「欲望」という概念は、あるシステムを作動させる動力(＝エネルギー)についての概念ではない。つまり構造を作動させる原理という意味での「力」ではない。そうではなくて・・・「構造化」し「秩序化」する原理なのである。」エロス原理は、世界を分節する「当のもの」、「それ以上分析できない“底板。”」と考えられている。
- (22) 前掲書『哲学的信仰』, 62-63頁。「理性は、本来の根源をもっておらず、むしろ実存の道具であるような、私たちの内なる包括者である。」「理性の気分とでも言うべきもの」等、ヤスパースは叙述する。本論では、無制約的な実存の意志であると解釈した。
- (23) 同上, 47-55頁。草薙正夫訳『哲学入門』新潮文庫, 1972年 改版, 110頁。
「神が存在する、無制約的な要求が存在する、人間は有限で未完成である、人間は神の導きによって生きることができる、世界の实在性は神と実存の間にはかない現存在をもつ、」と五つの根本原理(命題)に表現している。
Einführung in die Philosophie, Piper München Zürich, 2008, S.66
- (24) 草薙正夫訳『哲学への道』以文社, 1980年, 所収「私の哲学について」, 60-61頁
「あらゆる存在者のうちに限界と根拠が感得されるから、その存在者を超越者と結合する、いわば光の糸というようなものが至る所で感知されるのである。」超越者を内在的に捉えるということである。
Rechenschaft und Ausblick Reden und Aufsätze, R.piper & Co.Verlag. München, 1958, S.424
- (25) 『哲学的信仰』, 28-29頁。「最も広い意味での信仰とは、これらの両極性の中にあるありと現前しているということである。」両極性は、われわれである包括者の様態における主観－客観の両極性のことを言う(内界と環境、意識と対象、内なる理念と事物の理念、実存と超越者)。
- (26) 布施圭司『ヤスパース 交わりとしての思惟－ 暗号思想と交わり思想－』昭和堂, 2016年, 60頁。第二章 4 哲学的論理学と哲学的信仰の関係, において、「そもそも哲学的信仰とは『哲学』以来ヤスパースにとって哲学することに他ならないのであり」、と考察している。
- (27) 武藤光朗訳『哲学的世界定位〔哲学Ⅰ〕』創文社, 1972年, 緒言 x
『ヤスパース 交わりとしての思惟－ 暗号思想と交わり思想－』34頁, 「思惟を重視しつつも、『理性と実存』以降の重視と比すれば、思惟の位置付けが補助的とされている傾向が見て取れる。」と述べられる。
- (28) 橋本文夫訳『現代における理性と反理性』〔ヤスパース選集30〕理想社, 1974年, 78-79頁。「1950年ハイデルベルク大学全学生委員会の招待による特別講義」